

多言語国家ベルギーにおける文学史の諸相 ——脱構築的視点から見る「ベルギー文学史」の可能性——

三田順

序

大国フランス、イギリス、ドイツからの情報物資の行き交う中心地に位置するベルギーはしばしば「ヨーロッパの十字路」と評されてきた。ブリュッセルでは英国彙員 (anglophile) が知識階級の流行であったが故にラファエル前派が積極的に受容され¹、ゲルマン民族を賛えるリヒャルト・ヴァーグナーを忌避した普仏戦争敗北以後のパリとは異なり、ブリュッセルの王立歌劇場はヴァーグナー歌劇の中心的上演地の一つとなる²。中世以後、ブルゴーニュ公国、スペイン及びオーストリア・ハプスブルク家による支配を受け、ナポレオン時代にはフランス、その後はオランダの支配を経て独立したベルギーは必然的に多言語文化によって特徴付けられ、独立当初からその国家の存在意義を問う火種と成ってきた。

本論ではベルギーにおける多言語文化の諸相を文学史的観点から考察する。以下ではまず「ベルギー」を巡るアイデンティティーの問題を概観した後、ベルギーの二大言語であるオランダ語とフランス語文学における「ナショナル *nationaal/national*」という概念の齟齬を指摘し、これまでそれぞれ「オランダ文学」、「フランス文学」の枠組みで語られてきた両言語文学を脱構築的視点から「ベルギー」という枠組みで把握する可能性を提示する。

I. 「ベルギー人」とは誰か

(陛下)、

真実を申し上げます、重大な、恐るべき真実を。ベルギー人は存在しません。(中略)陛下は二つの民族を統治なされております。ベルギーには、ワロニー人とヴラーンデレン人がおりますが、ベルギー人はいないのです。³

作家、批評家、弁護士、そして政治家として活躍していたジュール・DESTREE (Jule Destrée, 1863-1936) が 1912 年に発表した「ワロニーとヴラーンデレンの分離についての王への手紙」として知られる公開状での上の発言は、ベルギーという国家が建国以来今日に至るまで抱えている根源的問題を端的に示している。

ベルギー文化について考察する際、その文化アイデンティティーを巡る闘争を無視して通ることとはできない。1830年に誕生したばかりのベルギーは紆余曲折を経てドイツ系の王を戴いた若い

¹ Cf. Francine-Claire Legrand, *Le symbolisme en Belgique* (Bruxelles: Laconti, 1971), p. 52; Laurence Brogniez, *Préraphaélisme et symbolisme: peinture littéraire et image poétique* (Paris: Honoré Champion, 2003).

² Cf. Michel Dragnet, *Le Symbolisme en Belgique* (Bruxelles: Fonds Mercator, 2010), pp. 161-165; Ulrich Prill, “‘Wagner, c’est précisément le musicien des poètes’: Die Wagner-Rezeption in Belgien und in der französischsprachigen Literatur Belgiens am Beispiel Van Lerberghes und Maeterlincks,” in Ernst Leonardy, ed., *Deutsch-belgische Beziehungen im kulturellen und literarischen Bereich, 1890-1940* (Frankfurt am Main: P. Lang, 1999), pp. 247-266.

³ Jule Destrée, *Lettre au roi sur la séparation de la Wallonie et de la Flandre* (Bruxelles: Weissenbruch, 1912), pp. 6, 8.

国家で⁴、対外的にはとりわけ国境を接し、言語を同じくするかつての支配者、フランス (1795-1814) とオランダ (1815-1830) の狭間にあって己が文化の独自性を求めねばならなかったが、デストレが暴露しているように、二十世紀初頭においても「ベルギー人」を巡るアイデンティティーの問題はオランダ語話者のゲルマン系 ヴラールンデレン人とフランス語話者であるラテン系ワロニー人という二大言語集団の間で解決されていなかった⁵。それどころか「ヴラールンデレン運動 Vlaamse Beweging」⁶の結果、当初弱者に甘んじていたヴラールンデレン人が発言力を増しつつあった一方で、南部ワロニーは炭鉱業の衰退と共に経済的、政治的な影響力を失い始めており、旧来の力関係が揺らぐ中で南北の対立は深刻さを増していた。

1830年のベルギーの独立は、オランダ支配下でのオランダ語化政策に不満を抱いたフランス語話者貴族層による反乱という性格を有していた。それ故に独立後のベルギーでは1898年まで長くフランス語のみが公用語として使用され、行政を始め司法、教育の場でもオランダ語の権利は抑圧されていた⁷。そうした中で生まれた「ヴラールンデレン運動」は当初ベルギーにおけるオランダ語の地位向上を求める文化的な運動であったが、1883年にオランダ語での中等教育が許可され、1898年にはオランダ語が公用語の地位を獲得する等⁸、ヴラールンデレン人が権利を拡大して行くにつれて政治的な運動へと変貌して行った。そして第一次、第二次世界大戦中にはこの内部分裂とヴラールンデレンの「親ゲルマン性」がドイツに利用され、ヴラールンデレンの独立を求める多くの対独協力者を生む要因となる。結果的にヴラールンデレンの独立は果たされなかったものの、戦後南部と北部の力関係は完全に逆転し、経済力を背景にした人口的多数派のヴラールンデレン人がフランス語話者に圧力を掛け始める。60年代に激化した所謂「言語戦争」は、ヴラールンデレンに在りながら依然として公的にオランダ語化されていなかった名門ルーヴェン大学の分割に象徴される⁹、言語圏の政治レベルでの分離へと繋がって行き、統一国家であったベルギーは1993年、遂に

⁴ ドイツ連邦 (Deutscher Bund) を構成する公国の一つであったザクセン＝コーブルク＝ゴータ (Sachsen-Coburg und Gotha) 家のレオポルトはベルギー政府の要請を受け、1831年にベルギー王レオポルト/レオポルド一世 (Leopold/Léopold I) として即位した。

⁵ ワロニー (Wallonie)、ヴラールンデレン (Vlaanderen) は、ベルギーの国土をおおよそ南北に二分しているそれぞれフランス語圏、オランダ語圏の地域。ヴラールンデレンについては、これまでフランス語由来の「フランドル la Flandre」や英語由来の「フランダース Flanders」といった表記も使用されてきたが、本稿では当地の言語であるオランダ語に依った表記を使用する。

⁶ 「ヴラールンデレン運動」について本稿では詳しく触れる余地が無いが、参考文献として以下を挙げる。Reginald de Schryver, ed., *Nieuwe encyclopedie van de Vlaamse Beweging* 1-3 (Tielt: Lannoo, 1998); Geert Buelens et al., *Over literatuur en Vlaamse Beweging 1890-1940* (Antwerpen: AMVC-Letterenhuis, 2005); Lode Wils, *Van de Belgische naar de Vlaamse natie: een geschiedenis van de Vlaamse beweging* (Leuven: Acco, 2009)。

⁷ ヴラールンデレン (Vlaanderen) におけるオランダ語は、日本で「フラマン語」と表記されることが多かったが、これは不正確な名称。「ヴラールンデレン語 het Vlaams」とは、ヴラールンデレンで話される数々のオランダ語方言の「総称」であり、独立した一言語どころか一方言ですらない。ベルギーにおける公用語としての名称はあくまで「オランダ語 (ネーデルラント語) het Nederlands」である。現代では文法、正書法等を統一した「標準オランダ語 het Standaardnederlands」が「オランダ語言語連合 Nederlandse Taalunie」(2012年現在、正加盟国および地域はオランダ、ヴラールンデレン、スリナム) によって定められ、公の場で使用されている。現在ベルギーの公用語はオランダ語、フランス語、ドイツ語の三ヶ国語。

⁸ オランダ語は1898年になってようやくベルギーの公用語としての地位を得た。それ以前にはオランダ王国の公用語であったオランダ語と差異化を図り、訛りの特に強い西ヴラールンデレンの方言を基盤とするヴラールンデレン固有の言語を標準化し「ヴラールンデレン語」とする試みもあったが、最終的にはオランダ側と協力して標準オランダ語を定め、使用することになった。またヴラールンデレンの大学で最初にオランダ語化されたのはヘント大学で1930年になってからのことである。オランダ語史については次を参照。Marijke van der Wal and Cor van Bree, *Geschiedenis van het Nederlands* (Utrecht: Het Spectrum, 1992); Guy Janssens and Ann Marynissen, *Het Nederlands vroeger en nu* (Leuven: Acco, 2003)。

⁹ ルーヴェン・カトリック大学は1425年に創立されたベルギー最古の大学で、1930年にヘント大学が完全にオランダ語化されて後もヴラールンデレンの街ルーヴェン (蘭: Leuven、仏: Louvain ルーヴァン) に在りながら、組織をオランダ語とフランス語に分け、使用言語を異にする二つの大学が存在する形で運営と教育が行われていたが、完全なオランダ語化を求めるヴラールンデレンの要求が増した結果、1968年にオランダ語の大学「ルーヴェン・カトリック大学 Katholieke Universiteit Leuven」とフランス語の「ルーヴァン・カトリック大学 L'Université catholique

連邦国家への再編成を完了した。しかしながら、2007年の総選挙後には九ヶ月余り、2009年の総選挙後には世界記録を更新する540日に亘って組閣が叶わなかった事実が物語っているように、オランダ語話者、フランス語話者間の、いわばヨーロッパの縮図ともいえるこのゲルマン対ラテン間の相克は依然この小国内でくすぶり続けている。

II. 「ベルギー文学史」の試み

2.1. 「ベルギー文学」とは何か

こうした国家にあって「ベルギー文学史」について語ろうとする際、そもそも「ベルギー文学」が存在するのかが常に問われてきたのは驚くべき事ではないが、この点について主にフランス語話者側でしか議論されてこなかった点は注目に値する。ここで「ベルギー文学」という語の持つ微妙な問題に一度目を向ける必要がある。「ベルギー文学」といった場合、少なくともベルギーにおけるオランダ語、フランス語という二大言語話者による文学を含んで然るべきだが、実際にはベルギーにおけるオランダ語文学は専ら「ヴラーンデレン文学 Vlaamse literatuur」ないし「南ネーデルラント文学 Zuidnederlandse literatuur」と呼ばれ、「ベルギー」という表現を冠してはいない。他方、ベルギーにおけるフランス語の文学は、フランスの存在感と錯綜する文化アイデンティティに起因する複雑な問題を抱えており、その名称に関して長く議論が行われてきた。それを「ヴラーンデレン文学」のようにベルギーのフランス語地域にあやかって「ワロニー文学 littérature wallonne」と呼ぶことはできない¹⁰。なぜならばベルギーにおけるフランス語による文学の中心地は建国以来首都ブリュッセルであり、この都市は地理的にはワロニーではなく、言わば飛び地としてヴラーンデレンに位置しているからである¹¹。

概括すると、「ベルギーにおけるフランス語による文学」を巡る一連の議論で問われて来たのは、それが「ベルギーにおけるフランス文学」なのか「フランス語によるベルギー文学」なのかであった。これはその文学が「フランス文学」の周縁に位置するに過ぎないのか、あるいは自立した一国民文学であり得るのか、という問いと言い換えることができよう。現在ベルギーにおけるフランス語文学史研究では、その名称、性格の変遷が主に三段階に分けられている。

- 一、1830 (1853) -1920 : 「遠心的段階 *phase centrifuge*」、 「(フランス語の) ベルギー文学 *littérature belge (de la langue française)*」
- 二、1920-1960/70 : 「向心的段階 *phase centripète*」、 「ベルギーのフランス文学 *littérature française de Belgique*」
- 三、1960/70- : 「弁証法的段階 *phase dialectique*」、 「ベルギーのフランス語話者文学 *littérature francophone de Belgique*」¹²

de Louvain」とに分割され、フランス語の「ルーヴァン・カトリック大学」は、ルーヴェンから約20キロ離れたワロニーの土地に新しく造られた街「新ルーヴァン Louvain-la-Neuve」市に移設された。

¹⁰ 更に「ワロニー文学 *la littérature wallonne*」という表現は、一般的にワロニー地域の(諸)方言で記された民間伝承や方言文学を指す為に使われている。Cf. De Geest (2005), p. 17. つまりここで「wallon」という形容詞は「ワロニー」という「地域」よりも、「方言」を喚起する「ワロニー語」を指示するものとして使用されている(ただし「ワロニー語 *le wallon*」は一般的に最も知名度が高く、最も広範囲に分布している方言であるものの、現在のワロニー地域には「ピカル語 *le picard*」、 「ロレーヌ語 *le lorrain*」等他の方言も存在している。さらに「ワロニー語」の中でもリエージュやナミュールの方言を区別する見方もある)。「ワロニーにおいて標準フランス語で書かれた文学」を指す為には「*la littérature en Wallonie* (ワロニーにおける文学)」ないし「*la littérature de Wallonie* (ワロニーの文学)」といった表現が使用されている。

¹¹ 現在ブリュッセルは「ブリュッセル首都圏地域」として行政上独立して扱われ、公の機関では蘭仏二言語使用が義務付けられている。

¹² Benoît Denis et Jean-Marie Klinkenberg, *La Littérature belge* (Bruxelles: Labor, 2005), p. 65.

ここで議論の核となっているのはフランス語文化の中心地たるフランスのヘゲモニーである。ベルギーにおけるフランス語文化は常に「フランス文化」の末端、周縁として吸収される危険があり、「フランス文化」への同化を志向する流れもベルギー建国当初から存在している。ベルギーにおいてフランス語で書かれた文学は、フランス、とりわけパリという中心との距離感を常に意識せざるを得ない定めにあるが、これはスイスやケベック等のフランス語圏と較べてベルギーが地理的、文化的に特に近い関係にあったことが大きな要因として考えられる。上の分類によれば第一期は、パリという「中心」から「遠」ざかる性格を有し、「フランス文学」に対して「ベルギー文学」という国民文学を打ち立てんとする段階にあり、第二期は「中心」を志「向」する性質を有していることになるが、ここで「*littérature française de Belgique*」は「ベルギーのフランス語文学」というよりは「ベルギーのフランス文学」と理解すべきであろう。

この分類は研究者 J・=M・クリンケンベルグによるものだが、実はこの図式が最初に発表された当初、第一期と第二期の名称は逆となっていた¹³。つまり、第一期をベルギーという「中心」へ「向」かう段階とし、第二期をその国民文学的な「中心」たるベルギーから「遠」ざかる段階を見なしたわけだが、その後クリンケンベルグは上の様に第一期と第二期の名称を入れ替え、その理由として、ベルギーという中心を作ろうとした運動は確かに「向心的」と呼ぶに相応しいものの、フランスの有する重力を重視し、フランスへの志向を「向心的」、フランスに対して独立せんとする動きを「遠心的」と呼ぶよう修正したと説明している¹⁴。これはベルギー人作家にとってフランス語文学の中心地としてのベルギーの役割が依然確固たるものではなく、フランス語(話者)文学におけるパリという中心の依然衰えぬ影響力を認めざるを得なかった現実を例証している¹⁵。

「場の理論」で知られる P・ブルデューは 1985 年の「ベルギー文学は存在するか」と題した小論で¹⁶、ベルギーにおけるフランス語による文学の自立性を考察している。そこでブルデューはベルギーに出版社、文芸誌、劇場といった制度が揃っていることを認めながらも、(フランス語で執筆する)ベルギーの作家が「ベルギーで」一流であると認められるためには「パリで」評価されることが常に条件となっているが故にベルギー文学の自立性を認めず、「ベルギー文学」は存在しないと結論づけている。しかしながらブルデューの結論はあくまで自身の「場の理論」を基に「ベルギー文学」の有無を論じている上、四頁足らずという短い論文であることもあってか、特にそのフランス語による文学を担った作家達のアイデンティティが時代によって大きく変化してきたことを十分に考慮しているとはいえず、ベルギー・フランス語文学史をかなり単純化して捉えている。ブルデューはベルギーが作家の評価、すなわち「固有の聖別化の審級 *instances de consécration spécifiques*」をパリに依存していると指摘しているが、ベルギー・フランス語圏も独自の文学アカデミー、文学賞といった審級制度を有しており、特に「近代文学」の成立時期に該当する上の「遠心的段階」においてベルギーの文学賞が少なからぬ意味を持っていたことは、ベルギー・フランス語近代文学の先駆者カミーユ・ルモニエ (Camille Lemonnier, 1844-1913) が 1883

¹³ Cf. Jean-Marie Klinkenberg, "La Production littéraire en Belgique francophone. Esquisse d'une sociologie historique," in *Littérature* 44 (1981): p. 41-48.

¹⁴ Denis et Klinkenberg, *op.cit.*, p. 65. 註 1。

¹⁵ 1981 年の論文の註でクリンケンベルグが、第一、第二段階の名称については L・=G・アンドリェーイェフの著書『ベルギー文学の百年』(Л. Г. Андреев, Сто лет бельгийской литературы, Изд-во Московского университета, Москва, 1967) 中の表現を基にしている断っているように、アンドリェーイェフの著作ではロシア語でそれぞれ「向心的傾向 центростремительная тенденция」、「遠心的傾向 центробежная тенденция」と表現されている。Андреев, *ibid.*, pp. 420-423.

¹⁶ Pierre Bourdieu, "Existe-t-il une littérature belge. Limite d'un champ et frontières politiques," in *Etude de lettres* 3 (1985): pp. 3-6.

年に国家から五年ごとに与えられる文学賞を逃した際に「抗議の為の盛大な宴 Banquet solennel de protestation」が催され、二百名を超える作家、芸術家、知識人が集ったことが物語っている¹⁷。そしてなによりもブルデューに限らず「ベルギー文学」について語られる時、いわばもう一つの「ベルギー文学」であるオランダ語による文学との関連が余りにも考慮されていない。以下ではこれまでそれぞれ「オランダ語文学」、「フランス文学」の中で別々に論じられてきた二つの文学を、それぞれの自律性を認めつつ複数形による「ベルギー(における)文学 literatures in België/littératures en Belgique」という枠組みで「ベルギー・オランダ語文学」、「ベルギー・フランス語文学」として論じる可能性、およびそれによって見えてくる新たな側面を提示したい。

2.2. ベルギー・オランダ語、フランス語文学における「nationale literatuur/littérature nationale」の齟齬

本論ではベルギーにおける両言語の文学の相関関係を客観的に把握するため「ベルギー・オランダ語文学」、「ベルギー・フランス語文学」という表現を用いるが、この両文学はこれまで「ベルギー文学」という一つの国民文学としての枠組みで把握されては来なかった¹⁸。その要因の一つには、ベルギーにおけるオランダ語文学が実際の所「ベルギー」という呼称を冠することを拒否してきた歴史がある¹⁹。既に言及したようにベルギー・オランダ語文学は実際の所「ヴラアンデレン文学」ないし「南ネーデルラント文学」と呼ばれてきた。「南ネーデルラント文学」は「北ネーデルラント文学」と対に成る表現であり、かつて「^{ネーデルラント}低地諸国Nederlanden」構成していた十七の州が宗教改革の結果、南部のカトリック十州（現ベルギー王国の大部分を含む地域）と北部プロテスタント七州（現オランダ王国にほぼ相当する地域）に分裂した歴史に由来する比較的客観的な表現といえる。しかし特にヴラアンデレンで使用される「ヴラアンデレン文学 Vlaamse literatuur」の「Vlaams」という形容詞に「ヴラアンデレン地域の」という地理的意味合いのみならず、「ヴラアンデレン人／民族の」といった民族主義的意味合いを読み取ることも十分に可能である²⁰。

¹⁷ Cf. Michel Biron, “27 mai 1883. Un banquet de réparation est organisé en l’honneur de Camille Lemonnier. L’Autonomie nouvelle de la littérature,” in Jean-Pierre Bertrand et al., *Histoire de la littérature belge francophone: 1830-2000* (Paris: Fayard, 2003), pp. 139-149.

¹⁸ 両言語文学を一つの文学史とした記述したものに、1921年にフランス語で発表されたポール・アメリユスの『ベルギーのフランス語およびヴラアンデレン文学序説』がある。Paul Hamelius, *Introduction de la littérature française et flamande de Belgique* (Bruxelles: J. Lebègue, 1921)。中世から世紀転換期までのベルギー王国の領域における両言語の文学を取り上げた本書は興味深い試みではあるが、本書の半分余りがベルギー建国以前の文学の記述で占められていることから分かるように、現代の「ベルギー文学」に歴史的権威を付与し、過去の文学との連続性を主張することが本書の狙いにある。よってベルギー建国前の著述家シャルル・ド・リーニュとマーテルランクは共に道徳家であり、コンシアンス、ド・コステール、ヴェラーレン等は社会問題から材を得ている点で共通している、といったような恣意的な一般化が散見される。またアルフォンス・バイヨは本書の批評でベルギー建国以前の文学を記述する際に現在のベルギー王国の領域に生まれた文学のみを取り上げることの無理を指摘している。

Alphonse Bayot, “Paul Hamelius, Introduction à la littérature française et flamande de Belgique,” in *Revue belge de philologie et d’histoire* 1, 2 (1922): pp. 351-360.

¹⁹ Cf. Dirk de Geest and Reine Meylaerts, “Littératures en Belgique / Literatures in België. Un problème, une problématique, un programme,” in Dirk de Geest and Reine Meylaerts, eds., *Littératures en Belgique / Literatures in België. Diversités culturelles et dynamiques littéraires / Culturele diversiteit in literaire dynamiek* (Bruxelles: PIE-Peter Lang, 2004), p. 17.

²⁰ 例えばベルギーには、オランダ語、フランス語、ドイツ語の各公用語の言語文化を管轄する三つの「言語共同体」があるが、フランス語圏、ドイツ語圏がそれぞれ「フランス語共同体 Communauté française (ただし2011年からは公の場で「ワロニー・ブリュッセル連邦 Fédération Wallonie-Bruxelles」を自称しているが、憲法上では依然〈フランス語共同体〉)」、「ドイツ語話者共同体 Deutschsprachige Gemeinschaft」と、言語を指示した名称を有している一方で、オランダ語圏のそれは「オランダ語共同体 Nederlandse Gemeenschap」ないし「オランダ語話者共同体 Nederlandstalige Gemeenschap」ではなく「Vlaamse gemeenschap」となっている。註7で言及した様に「ヴラアンデレン語」が存在せず、「言語共同体」が「地域」と結び付いたものではない以上（地域を管理する政府の構成単位は別に存在し、それぞれ「ヴラアンデレン地域 Vlaams Gewest」、「ワロニー地域 Region Wallonne」、「首都ブリュッ

ベルギー・オランダ語文学の嚆矢が「(ヴラーンデレンの) 民衆に読むことを教えた人物 *de man die zijn volk leerde lezen*」と評されるヘンドリック・コンシアンス (Hendrik Conscience, 1812-1883) が 1838 年に発表した『ヴラーンデレンの獅子、あるいは黄金拍車の戦い』である。この物語は 1302 年にヴラーンデレンの都市連合がコルトレイクでフランス軍を破った史実に着想を得たものであるが、オランダからの独立直後のベルギーで書かれたこの歴史小説で意図されているのが「反オランダ」ではなく、「反ベルギーのフランス語話者」である点は見逃せない。『ヴラーンデレンの獅子』初版本の小説本文に先だつ前書で、コンシアンスは「(ヴラーンデレン人の) 我らが読者に紹介する本書は、その nationaliteit と大胆さを証明する」²¹ (下線部強調はコンシアンス、括弧内補足は論者以下同) と述べ、以下九頁に亘って当時のベルギーにおける言語的不平等が論じられている。このようにヴラーンデレンのオランダ語文学運動が当初よりベルギーという国家における、フランス語話者の支配に対するヴラーンデレン人の文化的自立を求めるものであった以上、ここで「nationaliteit」という語は「国民性」ではなく、「民族性」と理解されるべきである。この歴史小説で意図されているのは過去の「フランス」に対する「ヴラーンデレン」の勝利の歴史を、十九世紀ベルギーで抑圧されていた「オランダ語話者」の「フランス語話者」に対する(未来の)勝利に重ね合わせることであり、本書は以後「ヴラーンデレン運動」の聖典にして、長くベルギー・オランダ語文学の規範ともなった。

前節で見たように、特に「遠心的段階」のベルギー・フランス語文学があくまでフランスとの関係においてベルギーにおける「国民文学」の確立を目指していた一方で、ベルギー・オランダ語文学はベルギーのフランス語話者に対抗する「ヴラーンデレン民族の文学」、すなわち「民族文学」として誕生した。「ベルギー文学」という枠組みで両言語文学を把握するのを難しくしてきたのは、言語の違いに加え、ベルギー・オランダ語文学とフランス語文学において「nationaal/national」という言葉の指す所が齟齬しているためである。

Ⅲ. 両言語文学の歴史的展開とアイデンティティー

3.1. 「国民/民族文学」の創出

既に言及したようにベルギーにおける公用語は 1898 年までフランス語に限られ、学校教育も長くフランス語のみで行われていたため、ベルギー文化を担った知識階級は出身地を問わず皆フランス語で教育を受け、フランス語の教養を身につけていた。それ故、一般的にはベルギー・フランス語文学に比して、ベルギー・オランダ語文学の発展が遅れていたかのような印象を受けるがそれは必ずしも正確ではない。確かにヨーロッパレベルで「フランス文学」と「オランダ語文学(南北ネーデルラント文学)」を比較した場合、パリを中心とする文学的水準は高く、フランス文学は長くオランダ語文学の規範であった。しかし、ベルギーにおける「国民/民族文学 *nationale literatuur/littérature nationale*」という意味では、文化的に抑圧されていたベルギー・オランダ語文学の方が実際には先行していたことを指摘する必要がある。

上述のように建国直後 1838 年に早くもヴラーンデレンに「民族文学」が登場した一方で、「最初のベルギー・フランス語文学」²²として文学史に名を残すシャルル・ド・コステール (Charles de Coster, 1827-1879) の『ヴラーンデレンと諸国におけるユーレンスピーゲルとラム・フートザクの

セル地域、仏 : Région de Bruxelles-Capitale/蘭 : Brussels Hoofdstedelijk Gewest) となっている)、ここで「Vlaams」という形容詞は「ヴラーンデレン人/民族」といった民族主義的意味合いを十分に喚起し得る。

²¹ Hendrik Conscience, *De leeuw van Vlaanderen of de Slag der gulden sporen* (Antwerpen: De Cort, 1838), p. II.

²² Cf. Marc Quaghebeur, *Balises pour l'histoire des lettres belges de langue française* (Bruxelles: Labor, 1998), pp. 33-37; Marnix Beyen, "1867. Parution de *La Légende d'Ulenspiegel* de Charles De Coster. Autour de la difficile naissance d'une littérature nationale," in Bertrand et al., *op.cit.*, pp. 107-116.

伝説及び英雄的で楽しく且つ華々しい冒険』が発表されるのは1867年になってのことである。また「ヴラーンデレン言語文学王立アカデミー」²³が1886年に設立されたのに対し、「ベルギー・フランス言語文学王立アカデミー」の設立されたのが1920年になってのことであることを鑑みても、「nationaal/national」な文学に対する意識は、ベルギーにおいてオランダ語文学がフランス語文学に先んじていた事実を示している。J・パックは著書『ベルギー象徴主義』（1989）で、1880年以前のベルギーにド・コステールという例外を除いて本格的な文学がなかったと記しているが²⁴、これはもちろんフランス語話者のみに限った一面的な見解である。近代ベルギー・オランダ語文学を代表する作家カーレル・ヴァン・デ・ウースティネは1919年の一文で「80年代初頭、ベルギーにおける文学状況はオランダ同様酷いものだったが、ベルギー・フランス語文学の状況はヴラーンデレン文学よりも劣悪であった」と述べ、続く部分でベルギー・フランス語話者の作家層の薄さを指摘している²⁵。フランス語が支配的なベルギーにおいてオランダ語で書くという、ベルギー・オランダ語文学の明確なアイデンティティは「ヴラーンデレン運動」と結び付いて文学活動に活力を与え、自身の詩の一節を冠した民族主義的団体「言語こそ民族の全て De Tael is gantsch het Volk」（1836）の設立に寄与した詩人プリューデンス・ヴァン・ダイセ（Prudens van Duyse, 1804-1859）、西ヴラーンデレン方言を用いて詩作を行ったヒド・ヘゼレ（Guido Gezelle, 1830-1899）、ヴラーンデレン学生運動の指導的存在であったアルプレヒト・ローデンバッハ（Albrecht Rodenbach, 1856-1880）等、コンシアンス以後も文学史に名を残す作家を多く輩出している。

他方、建国後長く専業作家の存在しなかったベルギー・フランス語文学界を満たしていたのは日曜作家とフランス文学の海賊版であったが²⁶、ベルギー・フランス語文学の誕生が遅れた大きな要因の一つには、フランス語という世界言語を母語としていることで洗練されたフランス文学を直接受容し、さらにはそこに直接参加することも可能であったフランス語話者にとって、「ベルギー文学」の概念およびその必要性自体が曖昧であったことは想像に難くない。無論、1830年、続いて1835年からは「ベルギーにおける文学振興及び発展の為の国民協会」によって発行された『ベルギー誌 *La Revue belge*』を例に挙げるまでもなく、国民文学の可能性は当初から熱心に議論されていた²⁷。しかしベルギー出身の劇作家ユベール＝ジョゼフ・エヴラールが1845年に記した一文は、フランス語という大言語を使用しながら独自の国民文学を生み出すことの難しさを良く伝えている。

そもそも、我々（ベルギー人）は一つの〈^{ナショナル}国民〉文学を有しているだろうか。

当然ながら否である。というのも我々には^{ナショナル}ベルギー国民の言語がないからだ。

ヴラーンデレン文学があると主張する者もあり、それに従えばヴラーンデレン^{ナショナル}民族文学が存在することになる。言葉通りに捉えるなら彼らの意見は正しい。

しかし依然として正書法について議論され、アルファベットの使い方も定まっていなかった言語による文学作品について我々は一体どのような判断を下せるというのだろうか²⁸。

²³ 1976年以降は「オランダ言語文学王立アカデミー-Koninklijke Academie voor Nederlandse Taal- en Letterkunde」。

²⁴ Jeannine Pacque, *Le Symbolisme belge* (Bruxelles: Labor, 1989), p. 14.

²⁵ Karel van de Woestijne, "Een gedenkteeken," in Van de Woestijne, *Verzameld Werk VI*, pp. 479f.

²⁶ Cf. Daniel Droixhe and Olivier Ledain, "22 août 1852. Un accord avec la France met fin à la contrefaçon en Belgique. De L'Incapacité littéraire des Belges. Complexe national et contrefaçon," in Bertrand et al., *op. cit.*, pp. 69-84; 岩本和子『周縁の文学——ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷』松籟社、2007年、25-52頁。

²⁷ Lieven D'hulst, "Comment « construire » une littérature nationale ? À propos des deux premières « Revue belge » (1830 et 1835-1843)," in *Contextes* no 4. 2008. (電子媒体)。ベルギー建国から第一次世界大戦前までのフランス語系芸術誌を考察した次の研究書がある。Paul Aron and Pierre-Yves Soucy, *Les revues littéraires belges de langue française de 1830 à nos jours: essai de répertoire* (Bruxelles: Labor, 1993).

²⁸ ベルギー独立してしばらくは近代的な標準オランダ語が整備されていなかったため、実際にはオランダ語の

フランス語で書くベルギー人についていえば、彼らがものしているのはフランス文学であって、それ以外の何物でもない。

筆者の知る限りスイス文学は存在しない。ブリュッセル同様、ジュネーヴではフランス文学が書かれており、別の州ではドイツ文学が書かれている²⁹。

(山括弧内はエヴラールによる強調)

そうした中、ヴラーンデレン人の父とワロニー人の母の間に生まれたド・コステールは、ヴラーンデレンにありながらフランス語化の進行していた首都ブリュッセルにて一つの解答を創り出す。元々ドイツの民衆の間で知られていた「オイレンシュピーゲル Eulenspiegel」の伝説をヴラーンデレンを舞台に翻案した上述の『ユーレンスピースpiegel伝説』や『ヴラーンデレンの伝説 *Les Légendes flamandes*』(1858)等で試みられた「ヴラーンデレン的物語をフランス語で書く」という折衷的アイデンティティーは、後の近代文学において花開くベルギー・フランス語文学の雛型となったのである。

3.2. 近代文学における展開

3.2.1 ベルギー・フランス語文学における「北方神話」と象徴主義

新国家ベルギー成立後半世紀経った1880年頃、ベルギー・フランス語文学は「ベルギー・ルネサンス」³⁰と呼ばれる転換期を迎える。そこで重要な役割を果たしたのが、ブリュッセルを拠点とする文芸誌『若きベルギー *La Jeune Belgique*』と『近代芸術 *L'Art moderne*』であり、いみじくも同じ1881年に創刊された両誌はそれぞれ志向する芸術を有し、いわば競合関係にあったものの、ベルギー・フランス語文学の近代化を目指す点で一致していた。中でも1883年に『若きベルギー』が企画した上述の「抗議の為の盛大な宴」は新世代の作家達が文学の自律を求めて国家に異議申し立てをした象徴的な出来事であり、M・ピロンは「この華々しい事件の結果、ベルギーは文学的に近代化した」と指摘している³¹。

しかしながらベルギー・フランス語近代文学は、政治等の外的要因に対する文学の自律性を求めると同時に、フランス文学に対する独自性を獲得する為に地域的なベルギー社会、政治状況と結び付いていなければならず、いわば二律背反的な課題を抱えていた。よって、『若きベルギー』はその創刊号の冒頭で手本とした『若きフランス *La Jeune France*』(1877-1888)誌の名を挙げながら「我々自身であろう *Soyons nous*」と宣言することで明確に「我々＝ベルギー人」の文学を構築することを宣言し³²、社会芸術を掲げる『近代芸術』はベルギー社会と結びつく文学を求め、編集長エドモン・ピカールは1897年の一文「ベルギー精神 *l'âme belge*」³³でベルギー性をゲルマ

ヴァリアント
様々な異形がヴラーンデレンで話されていた。当時の文献でしばしば「ヴラーンデレン語 *het Vlaams(ch)* (蘭) / *le flamand* (仏)」という表現が使用されているが、これはあくまでそうしたヴァリアントを総称した表現である。逆にいえば、オランダおよびヴラーンデレンで共通して使用されることになる標準オランダ語が定まる前だったからこそ、「言語こそ民族の全て」という標語に見られるように、ヴラーンデレン人が「固有」の言語を話しているという感覚を民衆が抱き易かったとも考えられる。

²⁹ Anonyme [= Hubert-Joseph Evrard], “préface,” in *Proverbes dramatiques* (Bruxelles-Liège, 1845), pp. I-XIII. 引用は Stefan Gross and Johannes Thomas, *Les Concepts nationaux de la littérature: l'exemple de la Belgique francophone 1, 1815-1880* (Aachen: Alano, 1989), p.131.

³⁰ 1880年をベルギーにおける一つの文化的転換点とする見方はベルギー・フランス語文学研究者の間で一般的に共有されている。Cf. Paul Gorceix, *La Belgique fin de siècle* (Bruxelles: Complexe, 1997), p. 14; Denis et Klinkenberg, *op.cit.*, p. 126.

³¹ Biron, *op.cit.*, p. 140.

³² *La Jeune Belgique* 1 (1881): p. 1.

³³ Edmond Picard, “L'Âme belge,” in *Revue encyclopédique: recueil documentaire universel et illustré* 24 Juillet (1897): p. 593-599.

ン性（ヴラーンデレン性）とラテン性（ワロニー性）の混交物として定義する。また上の「宴」の主演であり、この席で「ベルギー文学の元帥」³⁴と呼ばれた自然主義作家カミーユ・ルモニエは、美術批評『我らがヴラーンデレン人 *Nos Flamands*』（1869）等で、ヴラーンデレン美術という遺産によってベルギー文学のアイデンティティを補強し、以後頻繁に繰り返される「ヴラーンデレン＝絵画的」という形式の流布に寄与する。ド・コステールによって方向づけられた「ヴラーンデレン的な物語をフランス語で書く」という「国民文学」としてのベルギー・フランス語文学のアイデンティティは近代文学においても受け継がれるが、自然主義の後まもなく登場した象徴主義において「ヴラーンデレン性」は単なる主題から美学的に昇華されることでフランス語文学の中心地でも評価されるに至る。

ベルギー・フランス語象徴主義文学は、上述のクリンケンベルグの区分において依然「遠心的段階」に当たり、フランス語文学の「中心」たる「フランス」から、「遠」ざかる性質を有していた。強大なフランス文化の末端として吸収されず、ベルギー・フランス語文化としての自立性を獲得せんが為、ベルギーの若き文士たちは、ベルギー・フランス語話者文学史において「北方神話 *le mythe nordique*」³⁵と呼ばれる戦略的エクリチュールを選択する。クリンケンベルグは「この〈北方性〉というヴィジョンは二十世紀初頭まで、ベルギーのフランス語文学の全期間に影響を及ぼすことになる。北方性+フランス語という公式はこの文学についてのあらゆる言説の要約となり得るほどである」³⁶と述べるが、ここでベルギーの「北方性」を喚起する鍵となったのが「ヴラーンデレン性」であった。すなわち、ヴラーンデレンの古都を中世の面影残す神秘的空間として描いた小説『死都ブリュッヘ』（1892）によってパリで大成功を収めたジョルジュ・ローデンバック（Georges Rodenbach, 1855-1898）、ヴラーンデレンの風物をリューベンスやヨルダーンズ等のバロック絵画を思わせる官能性をもって謳ったエミール・ヴェラーレン（Émile Verhaeren, 1855-1916）、中世ヴラーンデレン神秘主義に影響を受けた戯曲によってヨーロッパ近代演劇の雄となったモーリス・マーテルランク（Maurice Maeterlinck, 1862-1949）によって知られるベルギー象徴主義文学は「ヴラーンデレン性」、「ゲルマン性」等といった言葉で語られる「北方的」要素を取り込むことで異化効果を生み出している。つまりクリンケンベルグが「マーテルランク、ヴェラーレン、エーカウドらのベルギーのフランス語話者文学が十九世紀末のパリで受け入れられたのはまさに、ヴラーンデレン性、北方性という差異性によって」³⁷であったと明確に指摘しているように、ベルギー・フランス語象徴主義文学の成功は「北国的」すなわち「ヴラーンデレン的」なベルギー・フランス語文学の喚起する「エグゾティスム」³⁸に多くを負っていたのである。

3.2.2. ワロニーにおける象徴主義受容と文化アイデンティティ

上述のように「遠心的段階」に位置するベルギー・フランス語文学は「ヴラーンデレン的フランス語文学」として自己規定することでフランス文学に対する独自性を獲得した訳だが、この背景にはブリュッセルがその中心であった十九世紀のベルギー・フランス語文学を担ったド・コステールを初めとする作家達のほとんどがヴラーンデレン系のフランス語話者であるという特殊な状況があった³⁹。

ベルギーの首都ブリュッセルは建国当初からベルギー文化、もといフランス語話者文化の中心

³⁴ Camille Lemonnier, *Noëls flamands* [1887] (Genève: Slatkine, 1980), p. IV.

³⁵ Cf. Denis et Klinkenberg, *op.cit.*, pp. 104ff.

³⁶ Jean-Marie Klinkenberg, “La génération de 1880 et la Flandre,” in Jean Weisgerber, ed., *Les Avant-gardes littéraires en Belgique : au confluent des arts et des langues (1880-1950)* (Bruxelles: Labor, 1991), p. 105. 次も参照：Denis et Klinkenberg (2005), pp. 104ff.

³⁷ Denis et Klinkenberg, *op.cit.*, p. 108.

³⁸ Idem.

³⁹ Cf. Bertrand et al., *op.cit.*, p. 9.

地であり続けているが、「ベルギー・フランス語の文学」の定義を複雑にしてきた要因の一つがブリュッセルの存在である。現在人口の八割がフランス語話者と言われる百万都市ブリュッセルは地理上ヴラーンデレンに位置するが、1960年代以降激化した「言語戦争」の結果「首都ブリュッセル地域」として行政上独立した蘭仏二言語併用地域となっている。今日ブリュッセルでフランス語話者が大多数を占めているのは、旧ベルギー植民地のコンゴや旧フランス植民地であった北アフリカ諸国からの移民の流入という近年の要因以上に、1830年の建国後長くフランス語のみが唯一の公用語であったベルギー王国の首都ブリュッセルにおいて、特に十九世紀後半から当地のヴラーンデレン人がフランス語話者へと転向していったことが大きい⁴⁰。つまり世紀転換期までのブリュッセルで活躍したフランス語話者達は、ヴラーンデレンの他地域出身のフランス語話者と同様にヴラーンデレン人としての意識を依然強く持っており、それは同じフランス語話者ではあるものの民族的にゲルマン系ではない、ラテン系ワロニー人のアイデンティティーとは本来明確に区別して考察されるべきである。「ヴラーンデレン的フランス語文学」としての「ベルギー・フランス語文学」のアイデンティティーは、フランス語支配に対抗するオランダ語話者は無論、ワロニーのフランス語話者にも首肯し難いものであり、畢竟、人口的に3%程を占めたに過ぎないヴラーンデレン系フランス語話者という、ごく限られた教養層にしか共有され得なかった⁴¹。これまでの研究はベルギーの言語文化の問題をオランダ語対フランス語、ヴラーンデレン対ワロニーという二元論に簡略化してきた嫌いがあるが、これはベルギーのフランス語文学史を読み解く上で見逃してはならない要素である。

こうした社会状況故、P・ゴルセクスが「ワロニー人、アルベール・モッケルを除く全員がフランス語で教育を受けたヴラーンデレン人であった」⁴²と指摘する通り、ベルギー象徴主義もまたヴラーンデレン出身のフランス語話者作家によって主導されていたことは多くの研究者によってすでに指摘されているが⁴³、象徴主義をベルギーに最初にもたらした人物こそ他ならぬワロニー出身のアルベール・モッケル (Albert Mockel, 1866-1945) であり、そこではブリュッセルに対抗するために生み出されたワロニーのアイデンティティーが重要な役割を演じていた。

ワロニーの古都リエージュの裕福な家庭に生まれたモッケルは学生時代からヴェルレーヌ、マラルメに倣った詩作を試みているが、今日では寧ろ象徴主義の理論家、批評家として評価されている。彼の名を世に知らしめた文芸誌『ワロニー-La Wallonie』(1886-1892)はモッケルの資金力を頼りとした同人誌的な性格が強く、その方針にはモッケルの嗜好が強く反映されていた。『ワロニー』の創刊された1886年はフランスの詩人ジャン・モレアス (Jean Moréas, 1856-1910) による所謂「宣言」⁴⁴によって象徴主義が新しい美学として広く知られることになった年で、『ワロニー』は「芸術の為の芸術」の主張の下、この新しい美学を積極的に取り入れて行く。後にはモッケルの呼びかけに応じてヴェルレーヌやマラルメ、ヴァレリー等フランスの代表的象徴派詩人も寄稿し、本誌は「ベルギー唯一の象徴主義雑誌であり、その名声はまさに国際的なものとなった」⁴⁵と評価されるに至る。

しかし『ワロニー』という誌名が示す通り、この雑誌は特に初期において地域主義的な性格を

⁴⁰ ブリュッセルのフランス語化については次が詳しい。Machteld de Metsenaere, “Thuis in gescheiden werelden — De migratoire en sociale aspecten van verfransing te Brussel in het midden van de 19e eeuw,” in *BTNG-RBHC XXI*, 3-4 (1990): pp. 383-412.

⁴¹ Cf. August Vermeylen, “La littérature belge [1930],” in August Vermeylen, *Verzameld werk. Deel 4* (Brussel: Manteau, 1955), p. 522.

⁴² Paul Gorceix, *Le Symbolisme en Belgique ou L'éveil à une identité culturelle. Une si rare différence....*, Tome I (Paris: Eurédit, 2008), p. 7.

⁴³ Cf. Denis et Klinkenberg, *op.cit.*, p. 132.

⁴⁴ Jean Moréas, “Le Symbolisme,” *Le Figaro. Supplément littéraire*, 18 septembre, 1886.

⁴⁵ Paque, *op. cit.*, p. 83.

強く押し出すことで独自のアイデンティティーの獲得を目指していた⁴⁶。その際『ワロニー』が打ち出した差異化の図式が、ベルギー・フランス語文学と同じ「フランス人対ベルギー・フランス語話者」ではなく、「ワロニー人対ベルギー（ブリュッセル）人」であったことは注目すべき点である。創刊二年目の1887年に、モッケルはワロニーの読者に次のように語り掛ける。

なんということか！皆さんはワロニー人なのです。ワロニー人であり続け、皆さんの種に反してベルギー人となることで身を汚してはなりません。……我々の快活さと、彼らのねっとりとした血とは全く似ても似つかぬものです。彼らはゲルマン人であり、我々はラテン人なのです。（中略）我々自身でありましょう、それ以外の何者でもなく。ワロニー人でありましょう、ベルギー人ではなく。⁴⁷

「ベルギー人」という語でモッケルが指しているのはブリュッセルのヴラーンデレン系フランス語話者である。「我々自身であろう *Soyons nous*」という『若きベルギー』の創刊宣言を振りつつ、モッケルは明らかにブリュッセル文壇を支配していたヴラーンデレン人、すなわち「ゲルマン系のフランス語話者」に対する「ラテン系ワロニー人」を対置させている。そしてモッケルはここで「ベルギー人」を指すために本来の表現である「Belges」ではなく、「ブルジョワ bourgeois」を喚起させる「Belgeois」という造語を使用することで否定的なニュアンスを強めてもいる。

『ワロニー』が生まれた背景には、アイデンティティーの異なるベルギーのフランス語話者間の勢力争いがあった。非政治性を掲げる『ワロニー』が積極的に受容した象徴主義は、当初「社会芸術 *l'art social*」を強く押し出していた『近代芸術』とは相容れず、形式的な保守性を保つフランス高踏派を擁護し、1880年代は象徴主義やモレアスの「宣言」にも批判的であった『若きベルギー』とも対立したが、これもまたブリュッセル文壇に対抗するためのモッケルの戦略であり、『ワロニー』は最新の近代美学である象徴主義とワロニー性という地域性の二つの柱を拠り所としてベルギー文学界での勢力争いを演じて行く⁴⁸。1890年、フランスの『政治的、文学的対話』誌八月号にカミーユ・ルモニエがフランス文学を剽窃しているとのいわれなき批判記事が掲載された際⁴⁹、『若きベルギー』は『近代芸術』、『ワロニー』、『プレイヤー』誌の名を挙げてベルギー人作家を擁護するために共闘しようと呼びかけるが⁵⁰、『ワロニー』誌でモッケルは次のように応える。

『政治的、文学的対話』誌へ。——『ワロニー』誌が政治的な瑣事に思いを巡らせたことは未だかつてない。（中略）そもそも、我々は全くもって「ベルギー人」ではないのであり、抗議をしたいのなら、それは『若きベルギー』誌の問題である。ワロニー人、リエージュ人である我々は、（北フランスの）ノルマンディー人や南フランス人以上に、人種的にフランス人の資格を有している⁵¹。

北仏、南仏人を引き合いに出しながら、ここでも言外に揶揄されているのはヴラーンデレン系

⁴⁶ Cf. Andrew Jackson Mathews, *La Wallonie 1886-1892. The Symbolist Movement in Belgium* (New York: King's crown press, 1947), pp. 43-52.

⁴⁷ *La Wallonie* (1887): p. 68.

⁴⁸ 鈴木智之は「文学雑誌『ワロニー』における地域主義的企図の生成と展開」と題した連作論文で社会学的な立場から、世紀末ベルギーの文学場において『ワロニー』誌が象徴主義と地域主義という二つの異なる方向性を如何にして戦略的に使用していたのかを詳細に分析している。

⁴⁹ Paul Adam, “Remarques sur la libération du territoire,” in *Entretiens politiques & littéraires* 1 Août (1890): pp. 143-147.

⁵⁰ *La Jeune Belgique* IX (1890): p. 321.

⁵¹ *La Wallonie* [1890] in *La Wallonie* 3 (Genève: Slatkine reprints, 1971), p. 253.

のフランス語話者である。このベルギーのフランス語話者間における錯綜した民族的、文化的対立意識は、ヴラールンデレン系フランス語話者に主導された首都ブリュッセルの「ゲルマン的」文化に対するワロニーの「ラテン性」意識を強め、『ワロニー』誌をして「フランス文化」の担い手として自覚せしむこととなる。結果的にこの反ブリュッセル志向が『ワロニー』のフランス化の誘因となり、1889年のマラルメとの出会いからモッケルが完全にパリ志向になったことで、ベルギーおよびワロニーでの存在意義を失った『ワロニー』はわずか六年の歴史と共に終刊を迎えることとなった。

3.2.3. 『ヴァン・ニュー・エン・ストラックス』とベルギー・オランダ語近代文学運動

ベルギー・フランス語近代文学は、ヴラールンデレン系フランス語話者はフランスに対して、ワロニー人はヴラールンデレン系フランス語話者に対して差異化を図るため、文学の自律を求めながらも地域性を主張するという相反する方向性を内包していた。他方、「民族文学」の概念が早くに確立していたベルギー・オランダ語文学の近代化は別の道を辿っている。

フランス語話者文学に遅れること十年余り、ベルギーにおけるオランダ語話者文学の近代化は文芸誌『ヴァン・ニュー・エン・ストラックス *Van Nu en Straks*』⁵²（以後『VNS』と略記）によってもたらされる。ブリュッセルで1893年に創刊されたこの雑誌は、十九世紀のオランダ語文学一般に支配的であったキリスト教に基づく道徳観や政治的な制約からの文学の解放、及びその自律を目指した点で隣国オランダにおける近代文学運動と軌を一にしていた。『VNS』は、1885年に創刊され、オランダ語圏で先んじて文学の近代化をもたらしたオランダの文芸誌『デ・ニューエ・ヒッズ *De Nieuwe Gids*』（以下『NG』と略記）⁵³誌としばしば比較され、その影響関係が指摘される。確かに『VNS』の執筆者達は『NG』にも寄稿しており、一般的にもオランダとヴラールンデレンの作家間の交流は盛んであった。しかし『NG』が、中心人物ウィレム・クロース（Willem Kloos、1859-1938）による、芸術のための芸術、形式と内容の一致、芸術作品の社会的内容からの解放、といった明確な綱領を有していたのに対して『VNS』は特定の信条を有しておらず、それは創刊号冒頭の「この南ネーデルラント出身の若者達による雑誌は—美的信条や流派を持たない—最新の意志と思考の表明である。この前衛雑誌は、この国および外国における、今の（van Nu）芸術に捧げられ、今後（van Straks）誕生する芸術に強い関心を抱いている」⁵⁴という言葉からも伺える。無論『VNS』が『NG』から大きな刺激を受けたことは疑いないが、フランス語を母語同様に操った『VNS』の執筆者達はベルギーのフランス語の文芸誌にも寄稿しており、当然フランス語圏からの影響も強く受けていた⁵⁵。中でも創刊者の一人であるアウヒュスト・ヴェルメイレン（August Vermeylen、1872-1945）が証言しているように、直接的刺激となったのは同国のベルギーで1881年に創刊された『若きベルギー』である⁵⁶。その創刊号で宣言された「我々は何より文学と芸術に取り組む。『若きベルギー』はいかなる流派にも成らない。それぞれのジャンルが必要な節度を保ち、それを理解する真の能力を有する者がいる限りにおいて、あらゆるジャンルが良いものであると我々は考えている」⁵⁷という言葉に見られる、特定の信条を有する流派を形成

⁵² 「今、そして今後の」の意。

⁵³ 「新しき案内人」の意。

⁵⁴ *Van Nu en Straks* 1 (1893): p. 1.

⁵⁵ 『VNS』とベルギー・フランス語圏の芸術誌との関係については以下が詳しい。Johan de Smet, “Van Nu en Straks in avant-gardistisch perspectief. Analogieën en divergenties met *L'Art Moderne*, *La Jeune Belgique* en *La Société Nouvelle*,” in Raf de Bont et al., *Niet onder één vlag: Van nu en straks en de paradoxen van het fin de siècle* (Gent: Koninklijke Academie voor Nederlandse Taal- en Letterkunde, 2005), pp. 109-143.

⁵⁶ August Vermeylen, *Les lettres néerlandaises en Belgique depuis 1830* [1906], in August Vermeylen, *Verzameld werk III* (Brussel: A. Manteau, 1953), p. 25.

⁵⁷ *La Jeune Belgique* 1 (1881): p. 1.

することへの警戒感は『VNS』と一致している。結果『VNS』は『NG』に比べ穏健な雑誌となったものの、カーレル・ヴァン・デ・ウースティネ (Karel van de Woestijne, 1878-1929) やステイン・ストルーヴェルス (Stijn Streuvels, 1871-1969)、ヘルマン・テイルリンク (Herman Teirlinck, 1879-1967) といった二十世紀前半のヴラーンデレン文学を担う新しい世代を『VNS』は輩出している。

中でもベルギー・オランダ語文学における唯一の象徴主義者として知られるヴァン・デ・ウースティネは「ベルギー文学」の存在を国際的に知らしめたベルギー象徴派を代表するローデンバック、ヴェラーレン、マーテルランク等、フランス語で執筆したヴラーンデレン人作家を「根を奪わた」存在と揶揄し⁵⁸、地域性を強調する彼らの作風、すなわち「北方神話」を批判しているが、そこには「象徴主義は地域主義を排除し、完全で、精錬され、純化され、殺菌された人間性に基づいている」⁵⁹という彼の象徴主義観が反映されている。そのためフランス語で執筆したヴラーンデレン作家が「ヴラーンデレン性」に代表される地域性を強調することに批判的である一方、地域性に囚われていないベルギー象徴主義作家にヴァン・デ・ウースティネは惜しみない賞賛を贈っている⁶⁰。

ベルギー・オランダ語文学はベルギーのフランス語支配に対抗するという明確なアイデンティティを有していたが故に、ベルギー・フランス語文学より遙かに早く「民族文学」を確立させ、ヴラーンデレン運動と結びついた地域主義文学の花を咲かせたが、それは逆に自律的な近代文学の誕生を遅らせることとなった。『VNS』の目指したオランダ語文学の近代化とは、ヴラーンデレンにおいてなによりもコンシアンス以来のヴラーンデレン運動と結びついた民族主義、地域主義文学からの脱却を意味しており、ヴァン・デ・ウースティネはオランダ語話者とフランス語話者の近代文学を比較して次のように述べている。「フランス語で書いたヴラーンデレン人達は、ヴラーンデレン語で書くヴラーンデレン人よりもはるかに自分の土地の外観を示すことに力を注いで来た。(中略)しかし上に挙げた世代の(オランダ語で書く)ヴラーンデレン人は初め視野を限ることを望まなかった。彼等は国の境界を超えて世界市民になることを望んだのである」⁶¹。『VNS』の洗礼を受けたヴァン・デ・ウースティネにとって、象徴主義という近代美学に地域性ではなく普遍性を求めたのは自然な流れであり、「北方神話」に依ったベルギー象徴派の地域主義志向は時代に逆行する批判対象とならざるを得なかったのである。

結びに代えて

本稿では、これまでそれぞれ「オランダ語文学」、「フランス文学」の枠組みで別々に語られてきた多言語国家ベルギーにおける文学史を「ベルギー」という枠組みで再考した。十九世紀中のベルギーではオランダ語文化が抑圧され軽んじられていたが故にベルギー・オランダ語文学はフランス語文学に比して後進的であったと一般的に考えられがちであるが、新国家ベルギーにおける「nationale literatuur/littérature nationale」の創出はオランダ語文学が遙かに先んじていた。その一方、文学の近代化ではフランス語文学に十年余り遅れを取ったものの、実のところベルギー・フランス語近代文学は文学の自律を求めながらも「北方神話」という地域性に縛られており、オランダ語近代文学は民族主義運動と結びついた地域主義文学からの脱却を目指し、真に自律的な近代文学を志向した点で一歩進んでいたともいえる。ベルギー・フランス語文学においては、外国人として初めてフランスのゴンクール賞を受賞するシャルル・プリスニエ (Charles Plisnier,

⁵⁸ Karel van de Woestijne, *Verzameld Werk IV* (Brussel: Manteau, 1949), p. 157.

⁵⁹ Karel van de Woestijne, “Belgisch Symbolisme,” in Van de Woestijne, *Verzameld Werk VI*, p. 105.

⁶⁰ カーレル・ヴァン・デ・ウースティネのベルギー象徴派批判については次を参照。Vic Nachtergaele, “Karel van de Woestijne en het Franse symbolisme in Vlaanderen,” in *Vlaanderen* 299 (2004): pp. 35-39.

⁶¹ Karel van de Woestijne, *Verzameld Werk VI*, p. 29.

1896-1952) を始めとした「月曜会 *Groupe du Lundi*」が、1937年に「ヴラーンデレン性」に代表される地域性からの解放を宣言するが⁶²、これは同時にベルギー・フランス語文学が「ベルギー文学」の自立性を否定する「ベルギーのフランス文学」としての「向心的段階」に入ったことを意味したのである。

ベルギー・フランス語文学はこれまで「フランス文学 *littérature française*」の中で周縁的なものとして扱われてきた。こうした旧来のフランス中心主義的な視点を脱構築する試みとして「フランス語話者文学 *littérature francophone*）」という視点からフランス語で書かれた文学を見直す動きが広がってはいるものの、この枠組みにおいても「ベルギー・フランス語（話者）文学」はカリブ海のマルティニーク等におけるポストコロニアル文学研究の隆盛の影に隠れがちであった。他方、「*Nederlandse literatuur*」といった場合、基本的に「オランダ（王国の）文学」に限らず「（南北ネーデルラントの）オランダ語文学」を指し、文学史では一般的に南北ネーデルラント文学が平等に扱われる。これはブリュッヘを中心とする南ネーデルラントにあったオランダ語文学の中心地が、十六世紀の宗教改革以後北ネーデルラントのアムステルダムへ移った歴史的経緯から、片方を切り離して文学史を記述することが困難であるためともいえるが、別の要因として、フランス、もといパリが「中心」としての圧倒的な権威を保持し続けているフランス（語）文学とは異なり、オランダ語文学にはあからさまな南北格差が存在しないことがある。文学史では一般的にベルギーが独立した近代以降も南北ネーデルラントの文学状況が平等に記述されており、大学の「オランダ学 *neerlandistiek*」でも両地域の文学史が同様の仕方で扱われている⁶³。しかしながら建国後のベルギーにおいて、フランス語支配に対抗する民族文学として誕生したベルギー・オランダ語文学、そして「ベルギー文学」としてのアイデンティティーを「北方性」もとい「ヴラーンデレン性」に求めつつ模索してきたベルギー・フランス語文学は互いの存在なくしては存在し得ず、それぞれを「フランス文学」、「オランダ語文学」と分けて論ずることはベルギーをベルギーたらしめている本質的な部分を見逃しかねない。加えて現在ベルギーには戦後第三の公用語となったドイツ語による文学⁶⁴もまた存在している。こうした多言語国家ベルギーにおける文学の諸相を把握するためには言語ではなく領域を単位とした「ベルギー（における）文学 *literaturen in België/littératures en Belgique/Literaturen in Belgien*」という視点が有効となろう。

⁶² Cf. Reine Meylaerts, “1^{er} Mars 1937. Le *Manifeste* du groupe du Lundi condamne le régionalisme littéraire. Enjeux nationaux et internationaux de la question identitaire,”; Paul Dirx, “2^e décembre 1937. Charles Plisnier remporte le prix Goncourt. Création et séduction: Charles Plisnier, prix Goncourt,” in Bertrand et al., *op.cit.*, pp. 379-410.

⁶³ 例えばオランダ文学者トン・アンベークが1990年に著書『1885年から1985年までのオランダ文学史』で試みた、オランダ王国の文学のみを取り上げた近現代文学史は多くの批判を招いた。Ton Anbeek, *Geschiedenis van de Nederlandse literatuur tussen 1885 en 1985* (Amsterdam: Arbeiderspers, 1990).

⁶⁴ ドイツと国境を接するベルギー東部、及びルクセンブルクと国境を接する南部では歴史的にドイツ語を話す住人がいたが、十九世紀中この地域で書かれた標準ドイツ語の文学作品は知られておらず、これらの地域に伝わる伝承等はドイツ語方言やフランス語で記録されていた。連邦制移行後に誕生したベルギーの「ドイツ語話者共同体」は、第一次世界大戦後ドイツからベルギーに割譲された東部国境地域が基盤となっている。Cf. Leo Wintgens, *Grundlegung einer Geschichte der Literatur in Ostbelgien: Bild der sprachlichen Wechselwirkungen im Zwischenland* (Eupen: Grenz-Echo, 1986); Philippe Beck, “Die deutschsprachige Literatur,” in Johannes Koll, ed., *Belgien: Geschichte, Politik, Kultur, Wirtschaft* (Münster: Aschendorff, 2007), pp. 203-224.